

2025年曳山祭順路図

4日
午後6:00～午後10:00まで
善徳寺前交差点から城端庁舎前交差点が
通行止

5日は右図の通り
午前8:30～6日午前0:00まで
通行止

← 午前
← 午後
← 提灯山
← 帰り山
● 終日車両通行止
■ 駐車場
→ 車両の進行方向
! 見どころポイント

●曳山祭見どきガイド

4日(日) 6ヶ町の各山宿での飾り山は必見です。
18:00～ 御旅所(じょうはな座)にて獅子舞、お着儀、浦安の舞、城端賛歌、庵唄が奉納披露されます。
18:30～ 曳山会館にて、獅子舞・浦安の舞・城端賛歌・庵唄合同披露等が催されます。(雨天中止)

5日(月) 9:00～ 御旅所から神輿・傘鉾行列が出発し、氏子町内を巡行、16:00ごろには神明宮へ還御されます。
10:00～ 善徳寺前に6台の曳山が集合し、野下→今町→西上→西下→東下→東上へと所望宿で庵唄を唄い巡行します。
13:00～17:00 東上(宗林寺町)から出丸に向けて巡行します。大工町での曳山屋根の折上げや、西下町(横町)と出丸町でのUターンが見ものです。
18:45 提灯山となり広小路を出発。西下→西上→大工町→新町
14:00頃と20:00頃 曳山会館(特設会場)にて各町の庵唄が披露されます。庵屋台・曳山紹介(14:00のみ)。
21:30～22:00頃 城端市民センター前での提灯山行列の引き返しは圧巻です。

飾り山宿	
① 大工町	大工町町内会 (畑 時夫宅)
② 西上町	溝口 英伸 (恵美須会館)
③ 東下町	東下町町内会 (東 町 庵)
④ 出丸町	古瀬 昇 (出丸町公民館)
⑤ 西下町	荒木 一雄 (西下町公民館)
⑥ 東上町	東上町町内会 (棚田均精宅)

ユネスコ無形文化遺産
国重要無形民俗文化財

城端
じょうはな

曳山祭

二〇二五年
五月五日
(宵祭四日)

画 小原好博



優雅な庵屋台と華麗な曳山行列、桐の花咲く坂の町に紫の香りが流れる。

「曳山」

一番山
大工町
千枚分銅山
せん まい ぶん どう やま
明治31年の大火で類焼、同39年
浅野喜平・辰次郎の作。 輻車
四方唐破風の屋根、平天井



関羽・周倉

《寛政8年(1796年)、荒木和助の作》



「御神像」



「庵屋台」

二番山
西上町
竹田山
たけ だ やま
安永年間、小原治五右衛門の作
(1772～1781年) 板車
四方一文字の屋根、平天井



恵比須

《寛政7年(1795年)、荒木和助の作》



三番山
東下町
東耀山
とう よう やま
享保年間の作を改修・増補
(1716～1736年) 輻車
前後唐破風の屋根、格天井



大黒天

《安永3年(1774年)、荒木和助の作》



四番山
出丸町
唐子山
から こ やま
享保年間の作を改修・増補
(1716～1736年) 板車
前後唐破風の屋根、平天井



布袋

《宝暦12年(1762年)、荒木和助の作》
《弘化3年(1846年)、小原治五右衛門改作》



五番山
西下町
諫鼓山
かん こ やま
享保年間の作を改修・増補
(1716～1736年) 板車
三方唐破風の屋根、平天井



堯王

《享保元年(1716年)、木屋仙人の作》



六番山
東上町
鶴舞山
つる まい やま
安永年間、小原治五右衛門の作
(1772～1781年) 輻車
千鳥・唐破風二重屋根、平天井



寿老

《安永2年(1773年)、荒木和助の作》



「庵唄」

解説：「端唄の流れる里 桂書房引用

玉川 冠友会
玉川の 水に晒せし 雪の肌 積もる口説の
その中に 解けし 島田のもつれ髪
思い出さずに 忘れずに また来る春と待つぞえ
〔解説〕幕末ごろに出来た唄といわれており、江戸庶民には必要な
飲み水の供給源であった玉川(現・多摩川)が舞台となっており、
江戸っ子は玉川の水を産湯に使うことが自慢で、殊に女性の色の白
さは玉川のおかげだと誇りにしていたようで、そのことからこの
曲はとても親しまれた曲でありました。歌詞には江戸の女性の恋が描
かれていますが、はかない運命に身を委ねる姿が、心に深く秘めた
恋を主題にしているの、しめやかにすがすがしく非常に色気のある曲調と
なっています。

辰巳 恵友会
辰巳や よいと、素足が あるく
羽織や お江戸の はこりもの
八幡鐘が なるわいな
〔解説〕(江戸小唄系)昭和中期の新作小唄の代表作品で、作詞者
は伊東深水、作曲は常磐津三蔵のコンビである。これを機会に後の「辰巳
の左様」が出来たが、「辰巳」は深川仲町の花柳界は江戸城から東向
(辰巳)に当たるのであ名称が生まれた。羽織若者の素足が売り物で
江戸っ子の人気を得たのである。「八幡鐘」は深川八幡の鐘を指し、
曲は三下りから八幡鐘で本調子に替る特な手附となっている。いかにも
小股の切れ上がりた曲といえる。

五月雨 宝稲会
五月雨に池の真ん中に 水まして
いづれがやめかきつばた 定かにそれと吉原へ
程遠からぬ水神の 離れ座敷の夕映えに
らよと見かわす富士筑波
〔解説〕(江戸端唄系)明治二十四年(一八八七)に当時名人と
称された清元お葉が作曲したもので、作詞は川田小一郎である。
日本銀行総裁であった川田が愛人を連れ、向島水神の料亭へ
百松に遊んだ時、はからずもう一人の愛人と鉢合わせになり、とん
だ勘当でとんだ。「富士筑波」はその意味で「いづれが吉原かうば」
も勿論、女性同士のことである。お葉はこの情景を好事に小唄としたの
で最後に「オクリ」が入っている。

雪巴 布袋同志会
雪巴に 降りしげる 屏風は恋の 中立ち
蝶と千鳥の三つづとん 元木に帰る ねぐら鳥
まだ 口青いぢや ないかいな
〔解説〕雪が深々とたくさん舞う夜、一人部屋で想いを寄せる男を
待つ遊女二人の為にしつらえた部屋には二人の恋をとりもつ屏風
がある。愛し合うために贈った布団もある。だけどなぜあな
たは来ないの、というか、もとの場所へ帰ってしまおうの私を抱か
ないまま、という遊女の女性の心情をしっかりと唄った名曲でござ
います。雪の降る夜は、熱も音も吸い取ってしまおうように、相手の心
からも奪い取ってしまおうのかもしれない。何とじれったいものな
のでしようか。
端唄の原曲は「雪巴(ゆきはともえ)」という題名ですが、ここ城
端では親しみをこめて庵唄の「雪巴(ゆきとも)」と呼んでおります。

空ほの 諫鼓共和会
空ほの とき 東雲に
木の向がくれの ほととぎす
鶯のほつれを かき上げる
柳のしずくか しずくが露か
ぬれてうれしき 今朝の雨
〔解説〕俗に黙阿弥のザンギリ狂言と称された明治を反映した
筋書きで、黙阿弥が白浪物一世一代の書き納めとしている。場面
は東京神楽坂の望月(金貨)の住居で、旅芸者弁天お照との濡れ
場の詞章である。

忍ぶ恋路 松声会
忍ぶ恋路は さてはかなさよ
今度逢うのが 命がけ よこす涙の 白粉も
その顔かくす 無理な酒
〔解説〕(上方端唄系)幕末ごろに江戸端唄として流行した、遊郭の
女性を題材とした曲です。忍ぶ恋路というからにはただならぬ表立
つては人に見えない関係なのでしょう。今後逢うのは文字通り「命が
け」ただでは済まないこともわかっている。だけど逢いたくてその
想いを巡らせるほど涙が溢れてきてしまふ。粉を塗るために飲めな
いお酒にまで手を出して押さえてがまんして耐えてみて、どうい
てもあの人へ想いを胸にしまっておくことが出来ない、死んでもい
いから逢いたいと思ってしまう苦しみがいかに伝わる名曲です。